

松沢老泉著『品物名数抄』について

On "Hinbutsu Meisūshō" by Matsuzawa Rōsen

三保 忠夫

Tadao MIHO

要旨 本稿は、『品物名数抄』（文化七年（一八一〇）刊行）という書物が松沢老泉の手になることをはっきりさせ、『品物名数抄』は、日本語助数詞に関する注目すべき専門書であること、この影響下に成る後続書のあることを指摘する。また、『品物名数抄』を翻字して次の段階（分析）にそなえたい。

【キーワード】 助数詞、松沢老泉、品物名数抄、書記言語

- 一、著者 松沢老泉
- 二、版本・写本
- 三、本文翻字
- 四、考察1
- 五、考察2
- 六、おわりに

一、著者 松沢老泉

『国書総目録』（岩波書店）第六卷には、「品物名数抄」として次の二項目が並置されている（八五八頁）。

品物名数抄

ひんぶつめいすうしやう 一巻

① 博物

② 松沢老泉

*近世漢字著者

述目録大成による

品物名数抄 一冊

① 博物

② 京都府

③ 文化七版

（下略）

同じ書名であるのに、二者を一緒にせず、別項目としたのは、二者は相異なる書物であると考えたためであろう。国文学研究資料館の「国書基本データベース（著作編）」でも同様である。後者の版本は各所に所蔵されているが（次項参照）、小泉吉永編著『往来物解題辞典』（二〇〇一年、大空社）では、「作者」不明」とし（解題編、七二六頁）、東京大学総合図書館（史料編纂所）・京都大学附属図書館（富士川本目録）・東北大学附属図書館（狩野文庫目録）などでも、後者の編著者につき、あえて触れない。編著者不詳と見たのであろう。

しかし、後者は、後に述べるように、松沢老泉（まつざわらうせん 明和六年（一七六九）～文政五年（一八二二）¹）の著述であると書いた蔵版目録があるので、結局、二者は同一書と認められる。

松沢老泉とは、勤勉・奮闘を貫き、一代にして三都に抽んでた書肆（二代目と泉屋庄次郎）となり、また、学者にもひけをとらない博学をもって出色の書誌学的業績を残した人物とされる。この人物につき、井上和雄編『以来長

書賣集覽^②では、

同 ^(和泉屋) 庄次郎へ松沢氏 慶元堂 宝曆―明治/初代は庄八 二代以後は庄次郎

との項目のもとに、小畑詩山の『慶元堂記』^③、また、「大槻如電翁の寄書」^④を引いている。その後者によれば、「松沢老泉 通称庄次郎 名は成楊(和雄按老泉名は麦字は十層成楊と号す 老泉は其晩年の号ならむ)」の父は庄八、泉州の人で、宝曆一二年江戸神田佐久間町に書店を開く、天明元年歿す、時に老泉は一三歳で、父の業を継ぐことができず、向島で紙漉をした、一七歳で古本業を始め、数年ならずして販路大いに進み、遂に浅草新寺町(南松山町)に一家を構えた、資性篤実にして且つ文才があったので、当時の諸名家に眷顧され、また、京阪の書林勝村治右衛門・秋田屋市兵衛等に信用されて一大世肆となった、世人は泉庄とのみ呼んだ、彙刻書目外集(文政五)^⑤・経籍答問(一名文会余業)・老泉漫録等の著がある、別号を一貫二麦居士という、蓋し錢一貫文・麦二斗より家を起こしたので、その本を忘れぬためであろう、(中略)老泉は文政五年三月二三日この世を去った、齡五四、浅草龍福院に葬る、その一男徳太郎(後万助と改める)は、遊蕩によって資財を浪費し、さしもの泉庄も閉店に至ったが、その子、また庄次郎を称し、上野の僧房に出入りし、慧澄律師に愛され、五戒庵の号を授けられ、東叡山の出版書典を請負って車坂下に開店し、その刊本大に行われたので新舗を下谷稲荷前に築き、慶元堂を中興し、明治一六年一月六四歳で歿した、その長男は早逝したので弟音次郎が跡を継ぎ、その子孝太郎が今の堂主である、代々泉庄の名を襲い、九世一五〇年に及ぶ、数年前に書舗は停めたが、なお旧宅に棲居しているのは父祖の余沢というべし、と見える(八、九頁、意を取って抄出した)。

弥吉光長氏^⑥によれば、代々の堂主は、大体、次のようにならう。

宝曆一二 一七六一 庄八(和泉屋初代)、泉州から出て江戸神田佐久間町に書店を開く。

天明 元 一七八一 庄八歿(四三歳)、閉店。時に、老泉(一三歳)、店が継げず、向島で紙漉をする。

天明 五 一七八五 老泉、古本業を営む(一七歳)。

寛政 元 一七八九 老泉、「寛政ノ初」に浅草新寺町に一家を構える(和泉屋二代目、以後庄次郎と称す)。

文化 七 一八一〇 『品物名数抄・陸氏經典釈文盛事』の刊行年。

文政 元 一八一八 万之助(億太郎)が三代目を継ぐ。

文政 二 一八一九 老泉、『彙刻書目外集』の「自叙」を書く。

文政 五 一八二二 三月二三日、老泉歿(五四歳)。

? 万之助、閉店。

天保 五 一八三四 久太郎(五戒庵)一五歳が四代目を継ぐ(泉庄中興、車坂下、また、下谷稲荷前に開店)。

天保一〇 一八三九 八月、万之助は老泉の小伝を書く。

元治 元 一八六四 仁三郎が五代目を継ぐ(早逝)。

? 仁三郎の弟音次郎が六代目を継ぐ。

明治一六 一八八三 久太郎(五戒庵)歿(六四歳)。

明治 末 一九一七 七代目孝太郎(音次郎の長男)店を閉じる。

老泉は、文政元年(一八一八)五〇歳で浅草堂前(今の松葉町)に隠居し、ますます書誌三昧に耽つたようである。店は三代目(万之助)が継いだ。書肆「和泉屋庄次郎」として、開版販売許可の初出は寛政二年(一八〇〇)極月、最終年は文化二年(一八一四)八月、一五年間の業績は、板元〇点、板元売出一二点、売出四点である。計三点は、儒書・漢詩文、また、本草和名・往来物等である。ここには「彙刻書目外集」「経籍答問(一名文会余業)」「品物名数抄」の名は見えない。

「慶元堂蔵板目錄」(第三種、文政三―五年)には、計二二点の書目が見え、仏書・漢籍・国書、また、書目・伝記・詩文・法帖・画譜・仮名草子・往来物、絵本など、多様な書目と共に「彙刻書目外集」「文会余業(経籍答問)」が見える。しかし、「品物名数抄」の名は見えない。

この蔵板目錄に「品物名数抄」の名が見えないのはなぜか、気になるところである。冒頭に触れた混乱もここに始まるのであるが、次の点からして、本書は老泉の著述になると判断して問題はない。

(イ) 『經典余師』菅家文章(小泉吉永氏蔵、天保七年(一八三六)夏発兌、東都書林 西宮弥兵衛・岡田屋嘉七・和泉屋市兵衛)の末尾に付き

れた「玉巖堂製本書目 江戸横山町三丁目 和泉屋金右衛門」の中に次の一点がある。

品物名数抄 松沢老泉著 全一冊

(口) 文行堂編『雪有香菟集書目二』(国立国会図書館蔵、213/45/397) の二ヶ所に次のように見える。

a 「玉巖堂頒行并製本書目 江戸横山町三丁目 和泉屋金右衛門」の書目中に、品物名数抄 松沢老泉著 全一冊 (4ウ、上段)

b 「玉巖堂製本書目 江戸横山町三丁目 和泉屋金右衛門」の書目の中に、品物名数抄 松沢老泉著 全一冊 (24ウ、下段)

老泉のもとで書肆業を学んだ人物に、平吉(和泉屋平吉)・庄兵衛・金右衛門がいる。その金右衛門(太田氏)は、独立して江戸両国横山町三丁目に店をもち(文政→明治)、玉巖堂和泉屋金右衛門と称した。右の(イ)・(口)は、その蔵版目録に見えるものである。

(ハ) 『近代著述目録後編』(国立国会図書館蔵、請求記号 201-1)

松沢老泉

名琴土屑称和泉屋庄二郎/江戸人

經典積文盛事

一

品物名数抄

一(オ)

彙刻書目外集

六

文会叢余

四

本目録は東条琴台編・里見敦補校の写本(和装)八冊(目録七冊・索引一冊)であり、この「巻五」(卅二丁オ・ウ)に右のような「松沢老泉」という著述者・その著書があがっている。

これらと和泉屋金右衛門(玉巖堂)の「製本書目」「頒行并製本書目」により、『品物名数抄』一冊は、松沢老泉の著作であると認められる。

二、版本・写本

本書は、各種の物品名を「文具・楽器・玩器・佩用・武具・射具・刀飾・鷹具・馬具・帛服・藉物・臥具・僧具・金玉・家具・夜用・途用・乗載・菜果・艸木・飲食・魚介・鳥獸・雑品」の二四種類に分類し、それぞれの名称

(語彙・文字表記・数え方を教えようとしたものである。

この版本・写本には、『国書総目録』『古典籍総合目録』(国文学研究資料館編)、及び、その他によれば、次のようなものがある。

* 版本「文化七年(一八一〇)年版」

慶応大学斯道文庫蔵A本、神宮文庫蔵本、学書言志(經典積文盛事と合)蔵本、関西大学蔵A本、同蔵B本、同蔵C本、小泉吉永氏蔵本

〔刊行年不詳〕

慶応大学斯道文庫蔵B本、静嘉堂文庫蔵本、東洋文庫岩崎文庫蔵本、宮内庁書陵部、東京国立博物館蔵本、京都大学富土川文庫蔵本、早稲田大学蔵本、東京大学総合図書館蔵本、東京大学史料編纂所蔵本、東北大学狩野文庫蔵本、日本大学蔵本、岩瀬文庫蔵本、竹清文庫蔵本、無窮会神習文庫蔵本、長崎県立図書館長崎文庫蔵本

* 写本「書写年不詳」

京都府総合資料館蔵本

版本の所蔵元の一つに「学書言志」と見えるが、これにつき、『国書総目録』の「図書館・文庫一覧」(凡例)には全く説明がない。

さて、筆者の調査はまだまだ途上であるが、管見に及んだ版本について述べておく。

以下、原本の改行を/印、割書、もしくは小書きの文字をへ印で示す。

〔文化七年(一八一〇)年版〕

○慶応義塾大学附属研究所斯道文庫蔵A本 一冊(請求記号 浜野文庫 04A/45/1)

原表紙の原題簽(縦一五・三センチメートル、横三・二センチメートル)に「品物名数抄 完」(原、左側、双郭)とある。寸法は、縦三二・六センチ

メートル、横二六・〇センチメートル、本文匡郭は四周单边、縦一八・八センチメートル、横一三・六センチメートル。表紙は薄黄緑色。内容は、「品物名数抄」本文七丁、「陸氏經典積文盛事」一〇丁、「翻刻經典積文始末」一丁の計一八丁からなる。

柱刻は、それぞれ、「品物名数抄 一(一七)」「經典積文盛事 一(一十)慶元堂／馳名記」「經典積文始末 全一」とある。「蔵版目録」や「伏裏」はない。蔵書印Ⅱ「浜野文庫」(朱)、「麻生文庫」(朱)、「加納／□□／細工印」(朱横印)、「慶応義塾大学／斯道文庫蔵書」(朱)、後表紙見返しに「雍州」「皇都」「池田龍照齋」「孝寿蔵」「平安住池田龍照齋／孝寿(花押)」などの墨筆がある。

〔陸氏經典積文盛事〕の末尾

文化戊午春正月日／

慶元堂主人謹識

〔經典積文始末〕の末尾

文化七庚午春正月日

江戸浅草新寺町板元物之本屋

和泉屋庄治郎記ス

○関西大学蔵A本 一冊(請求記号 I23/000/19' 図書番号 205708498)

(総図文庫特別)

関西大学には、文化七年(一八一〇)版本が三点所蔵されている。その内の一点で、この外題は題簽(縦一五・〇センチメートル、横二・七五センチメートル)に「品物名数抄 完」(原、左側、双郭)とある。また、この右に並んで墨筆で「經典積文盛事」とある。新帙を有し、この題簽には墨筆で「品物名数抄／陸氏經典積文盛事」とある。寸法は、縦二一・八センチメートル、横一六・二センチメートル、本文匡郭は四周単辺、縦一八・八センチメートル、横一三・六センチメートル。表紙は薄黄緑色。内容は、目録二丁、「品物名数抄」七丁、「陸氏經典積文盛事」一〇丁、「翻刻經典積文始末」一丁、蔵版目録六丁、の計二五丁からなる。柱刻は、それぞれ、「目録」「品物名数抄 一(一七)」「經典積文盛事 一(一十)慶元堂／馳名記」「經典積文始末 全一」「蔵板目録 一(一六)」とある。伏裏はない。蔵書印Ⅱ「墨化／台図／書記」(朱方印)、その他二種。

用件と見られる条を次に掲げるが、「陸氏經典積文盛事」の末尾には「文化戊午春正月日」とあり、「經典積文始末」の末尾には「文化七庚午春正月日」とある。文化七年(一八一〇)の干支は庚午であるが、「文化戊午」と

は不審である。「戊午」は、近いところでは寛政一〇年(一七九八)がそれである。あるいは、この仕事が始まったことでも暗示しているのであろうか。

〔陸氏經典積文盛事〕の末尾

文化戊午春正月日／

慶元堂主人謹識

〔經典積文始末〕

(半丁、一二分の野線あり)

〔翻刻經典積文始末〕

本舗翻刻スル所ノ經典積文并考証ハ享和辛酉ノ初ノ夏友人翫月書房ニ得ル所ニシテ希世ノ好本ナリ吾ノ家書ヲ鬻テ以テ業トスルニ二世ニシテ五十年ニチノカシ吾父ノ時数数火災ニカ、リテ家貧シカリシカノ寛政ノ初ノ地ニ移リシヨリ家業モ日日ニ広クナリシ事偏ニ四方ノ書ヲ好ム諸君子ノ庇廕ニヨレリノ予年来有用ノ書ヲ翻刻シ利欲ニ拘ラズ長ク世世ニ伝ノヲ思ヒシニハカラスモ此書ヲ得ルヲ悦ビノ翻刻ヲ企ルノ凡十年ニシテ其功ヲ成セリ然リトイヘドモ雕刻ノ雜費多シテ千部ヲ鬻ヲ得ザレハ其ノ

〔費用ヲ償フコトヲ得ス希クハ四方ノ諸君子一本ヲ求テ予ガ力ヲ助ケ玉

ハ、幸甚カラン其価ノ品ニ左ニノ記ス

全三十冊

精製上本 価金巻筒壹分
美濃紙摺 価金巻筒貳分

右ハ当地ノ定価ナリ若他邦ヨリ求ルモノハ地ノノ遠近ニヨリテ価モ増ス「アルベシ希クハ是書天ノ下ニ流伝シテ長ク不朽ニ伝ヘン」ヲ是四方ノ諸ノ君子ニ望ム所ナリ

文化七庚午春正月日

江戸浅草新寺町板元物之本屋

和泉屋庄治郎記ス

〔蔵板目録〕、第一丁オモテ首部

慶元堂蔵板目録

全六冊

四庫全書総目

全六冊

(広告文略)

唐宋八大家読本

清沈德潜著

全十六冊

(以下、略)

〔蔵板目録〕中の一点、「陸徳明經典積文并考証」の広生)

陸徳明經典積文并考証全冊

コノ書ノ原本ハ影宋本ニシテ清盧文昭ノ考証ヲ為ル其中 本邦物

氏ノ七經ノ孟子考文補遺等ノ書並ニ唐宋以上ノ書ニ依テ精微ニ校

正ス 本邦へ唯一本ノ舶来セシヲ得テ翻刊ス実ニ經學者ノ文房ニ
須臾モ無ンバアルベカラザル書ナリノ此書ノ奇特ナルハ予ガ著ス
所ノ經典ノ積文盛事ニ詳リ

所ノ經典ノ積文盛事ニ詳リ

○関西大学蔵B本 一冊(請求記号L23/000/6086 図書番号208082018)

関西大学蔵の三点の内の一点であるが、これは慶元堂五戒庵の自ら所蔵していたものとして珍重される。外題は題簽(縦一五・〇センチ、横二・七センチ)に「品物名数抄 完(原、左側、双郭)とある。新帙あり。版は右に同じ。寸法は、縦二二・七センチ、横一六・〇センチ、表紙は薄黄緑色。内容は、目録一丁、「品物名数抄」七丁、「陸氏經典積文盛事」一〇丁、「翻刻經典積文始末」一丁、蔵版目録六丁、の計二五丁からなる。柱刻は、それぞれ、「目録」「品物名数抄 一(七)」「經典積文盛事 一(十)」「慶元堂ノ馳名記」「經典積文始末 全一」「蔵板目録 一(六)」とある。伏裏はない。蔵書印は「オモテ・目録題の下に、「和楽」(打出の小槌形の印)、「孔石山房主人ノ秋田氏図書記ノ集散任天然ノ永為四海宝」(朱方印)、「慶元堂ノ五戒庵ノ蔵書記」(朱方複郭印)、「高林坊ノ文庫記」(朱長方印)、内題下に、「藤印ノ忠淳」(朱方陰刻印)、表紙右下に「五戒庵文庫」(墨書)

「陸氏經典積文盛事」の末尾には、「文化戊午春」云々、「翻刻經典積文始末」の末尾には、「文化七庚午春」云々とある。

○関西大学蔵C本 一冊(請求記号L23/000/6116 図書番号208470654)

右の二本に全同の一本である。外題は題簽(縦一五・〇センチ、横二・七センチ)に「品物名数抄 完(原、左側、双郭)とある。新帙あり。寸法は、縦二二・五センチ、横一六・一センチ、表紙は薄黄緑色。内

容は、目録一丁、「品物名数抄」七丁、「陸氏經典積文盛事」一〇丁、「翻刻經典積文始末」一丁、蔵版目録六丁、の計二五丁からなる。蔵書印は「下埜國ノ渡部氏ノ蔵書印」(朱方印)、「埜」は「野」の古字)、「真ノ温」(朱方陰刻印)

「陸氏經典積文盛事」の末尾には、「文化戊午春」云々、「翻刻經典積文始末」の末尾には、「文化七庚午春」云々とある。

〔刊行年不詳〕

○慶應義塾大学附属研究所斯道文庫蔵B本 一冊(請求記号浜野文庫 04A/4-6/1)

後補表紙の後補題簽に「品物名数抄 完(後、左側、双郭)とある。寸法は、縦二二・一センチ、横一七・九センチ、表紙は薄黄緑色。内容は、「品物名数抄」本文七丁だけで、「陸氏經典積文盛事」「翻刻經典積文始末」「蔵版目録」「伏裏」などはない。蔵書印は「浜野文庫」(朱、この印の下方に花押がある)、「麻生文庫」(朱)、「慶應義塾大学ノ斯道文庫蔵書」(朱)。

○東京大学総合図書館蔵本 一冊(請求番号A20/176 B42805)

江戸後期刊。古い表紙を除いて新しく朱表紙を付しているが(この上に厚紙の鞘表紙を付ける)、外題の題簽はもとの古い原題簽(縦一五・三センチ、横三・二センチ)を用いている。題簽には「品物名数抄 完(左側、双郭)とある。柱には上象尾に「品物名数抄」の柱刻、下象尾に丁数、製版、本文は漢字・片仮名、付訓は片仮名、画・色はなし、寸法は、縦二二・五センチ、横一六・三センチ、本文匡郭は四周单边、縦一八・八センチ、横一三・六センチ、無界(一面)一行、おおむね本文は三段に組む。「品物名数抄」本文は七丁、これに蔵版目録六丁(丁付は新たに「一」から付す)を付して計二三丁から成る。本文は後に翻字する。これは関西大学蔵文化七年版本、斯道文庫(慶應義塾大学附属研究所)蔵文化七年版本などに同じ版である。但し、次の史料編纂所蔵本は、第一丁の前に「目録」の一丁ウがあるが、こちらはそれを欠く。蔵書印は朱方印「南葵ノ文庫」

「坂田文庫」「東京帝／国大学／図書印」、また、「南葵文庫」の青スタンプに購入「古本／(中略)／明治三十六年十二月廿二日」とある。

○東京大学史料編纂所蔵本 一冊(請求記号I006/26、登録番号6800137074 書誌ID21714236 NCID BA62895629)

出版地不明、出版者不明とある一本で(江戸後期刊)、新しい茶・無地の表紙に新しい題簽を付し「品物名数抄」(左側、双郭)と墨書する。柱刻は、「品物名数抄三目録」(首の目録のみ)・「品物名数抄」(丁付一七)とある。「伏裏」の一丁には柱刻がない。寸法は、縦二二・一センチ、横一五・八センチ、丁数は、目録一丁・「品物名数抄」本文七丁・伏裏一丁の計九丁、これに蔵版目録六丁を付して計一三丁から成る。一頁一〇行。本文は東京大学総合図書館蔵本や斯道文庫(慶應義塾大学附属研究所)蔵文化七年版本などに同じ版である。蔵書印「武田氏／蔵書印」「東京帝／国大学／図書印」「東京帝／国大学文／学部史料／編纂所」等の朱印あり。やや虫損が目立つ。

「目次」「伏裏」は次のようになっていた。目録は、二項目(二語)ずつで改行されている。

(巻首の「目録」一丁分)

品物名数抄	目録
文具類	楽器類
玩具類	佩用類
武器類	射具類
刀飾類	鷹具類
馬具類	帛服類
藉物類	臥具類
僧具類	金玉類
家具類	夜用類
途用類	乗載類
菜果類	艸木類

(オ)

飲食類 魚介類
鳥獣類 雑品類

(五行分空白)

目録畢

(ウ)

〔伏裏〕(便宜上、行頭に行数を付す。第三・第四行の二行は他行より細い字となつてゐる)

「1」伏裏

2 予が祖父ハ俗に「ならば本屋」といふ物にして。書を攤て鬻く傍。自身屑麦を製して買へり。これに仍て世人譚名して。「ひきはり本屋」と通称し給ひき。

4 安永年中梓行ありし七十五日と題せる俗書に御蔵前元旅籠町ひきわり本や庄

5 次郎と云々載たり其後天明七丁未年店を今の地にうつして店をひらく

6 祖父嘗て喘息を患ふ。或人の教について。朝夕屑麦飯を食すること凡一ケ年

7 病果して愈たり。其後怠りて麦食を廢れば忽ち旧病頓に発る。こゝに

8 おゐて再び食する事又一ケ年。竟に病を忘る爾より来。麦食に親て自ら

9 製法を考へ。朝夕怠らず食事となしぬ。且知已に喘息を患る者あれば。

10 懇にこれを教へ。又手自製したる屑麦を鬻。同病の人を救はんことをねが

11 たり。祖父が製する所。其法最精しく碎屑の術亦妙を得たり。因て

「ウ」1 自ら表鬼と号し。年五十にして家事を予が父に譲り。閑居して自

2 楽ミ。長寿にして終れり。予が父業を継で鬻來る事既に年久し。

迹

3 来又予をして箕裘の業を継しむ。これによつて。祖父と父との

志

4 継て。屑麦を鬻ぐ事を更めず。当時文学盛に行ハレ。営生おのづ

から

5 繁昌の恩恵をもつて。父が代より書林となりしゆゑ。家あらたに

6 塵あらたまりて。傍屑麦を買ふことを。知る人疎くなりぬ。仍て

当般

7 報条作りて。本屋の古を語り。今も猶絶す屑麦を買ふ由を述て。

8 普く世に弘むる事しかり

9 ○精製挽割麥

10 本屋 慶一元堂 和泉屋庄治郎

「伏稟」とは、世の人、読者に伏して申し上げるとの意味であろう。いわば口上書きであるが、ウラの6・7行目に「当般報条作りて」と見える。「ひきふだ（引札）」とは、広告・宣伝のための刷り物をいう。あるいは、この一丁は、そうした一枚物をここに綴じ込んだのかも知れない。

祖父は本屋をしながら「屑麦を製して賣へり。」と書き始め、彼は喘息を病んでいたが麦食をして治つたこと、「父が代より書林となりしゆゑ」云々と、本屋慶元堂の三代の略歴を述べながら、今なお、屑麦本屋を営んでいる由を記している。この著者「慶元堂 和泉屋庄治郎」とは、松沢老泉（明和六年へ一七六九）〜文政五年へ一八二二の息、万之助（億太郎）である。万之助は、老泉一代の小伝（「天保十亥年八月」制作）も書いている。

○京都大学富士川文庫蔵本 一冊（請求記号 富士川／ヒ／33、登録番号 186628）

外題は題簽（縦一五・〇センチメートル、横二・七センチメートル）に「品物名数抄 完」（原、左側、双郭）とある。版は右に同じ。寸法は、縦二二・八センチメートル、横一六・二センチメートル。表紙は薄黄緑色、青色帙あり。内容は、目録一丁、「品物名数抄」七丁、蔵版目録や伏稟はない。蔵書印Ⅱ「京都／帝國大学／図書之印」（朱方印）、「186628／大正7.3.31」（楳田黒印）

「書写年不詳（写本）」

○京都府総合資料館蔵本 一冊（請求記号和/020/40）

江戸末期写。右の版本を行取り・字数・書体・付訓など、そのままに手写して仮綴じとした一冊。半紙二枚を二つ折りにして用い、書写後、コヨリ様の紐で大和綴じとする。表紙相当のオモテに「品物名数抄 完」と外題墨書がある（原、直、中央）。寸法は、縦三三・二センチメートル、横一七・七センチメートル、楮紙。全二一丁の内訳は、前後の表紙分二丁、本文の目録一丁、「品物名数抄」本文八丁、伏稟二丁である。全体を二人の手で写しており、その一人目は、本文部八丁の第二丁目まで、もう一人は次の第三丁目以下を担当している。但し、この第二丁と第三丁とは重複しており（同じ内容）、これが版本の第二丁（刀脇挿し幕／鐵砲／鞆）に相当する。蔵版目録はない。後

表紙の見返しに「天保十五甲辰年（一八四四）（金力）□菊潭先生／写之」（墨筆）とある。しかし、筆勢がないから、あるいは、その後、江戸末期の書写になるものかも知れない。表紙見返しに「寄贈／池田次郎／大正14.5.27」（朱印）、第一紙オモテに「京都府／図書／館印」（朱方印）。

本書は、版本を精確に写そうとしたものだが、ときに本文部・伏稟などの付訓の仮名・合符等を脱している。

三、本文翻字

次に本文七丁分を翻字する。底本は、東京大学総合図書館蔵本（一冊、請求番号 A20/176 B42805）である。この七丁分の版は、文化七年版の関西大学蔵B本、斯道文庫（慶應義塾大学附属研究所）蔵本など、また、実見した限りの刊行年不詳の蔵本と同じものである。但し、諸本の間には、版木の刷り具合による筆画や付訓の鮮明・不鮮明の差異がある。

《凡例》・底本では、次のように、割書の中に用いるべき助数詞が示されている。ここに、ときに振り仮名や約物等があつて製版上、困難を伴うことがある。そこで、以下には、割書は「へ一管 一本 一 枝 俗称片枝／一對八二本ナリ」のような形式に改める。／印

は、改行あることをいう。

筆 一管一本一 枝 俗称片枝
一対二本ナリ
墨 一挺一 笏 硯 一面 硯匣 一合

・底本における下段、または三段目が翻字で次行に回ることがある。

・字体につき、底本は「稱」「称」、「雙」「双」など混用している。これらはこのままとする。

・行頭に、私に丁数、行数を付す。

〔翻字〕

- 1 品物名数抄
- 2 (一行空白)
- 3 文具類
- 4 筆 へ二管 一本 一枝 俗称片枝／一對二本ナリ
- 5 墨 へ一挺 一笏 硯 へ一面
- 6 硯匣 へ一合 筆架 へ二架 机 へ二脚 一前
- 7 紙 へ二挺 一牧 一葉／一張 十帖ヲ一束
- 8 書状 へ一通 一封 書籍 へ二卷 一冊／全ヲ一部ト云
- 9 懷紙 へ一巡 卷物 へ一卷 掛物 へ二幅 一軸
- 10 楽器類
- 1 和琴 へ一面 箏 へ一張
- 2 琵琶 へ一面 箏 へ一管 鐘 へ一口
- 3 磬 へ一口 一架／一枚 一基 太鼓 へ二掛／一柄
- 4 鼓 へ二丁 一張 假面 へ一面 一頭／一枚
- 玩具類

〔牙〕

- 10 靴 へ一丸 一惣 屨 へ二面 通ニス 碁 象・戯雙・六一
- 9 佩用類
- 8 扇 へ一本 一柄 一握／一把 一枚 拭服紗 へ一條 手巾一枚
- 7 印・籠 巾・著緒・ト根・著 へ一具 櫛 へ一枚
- 6 髮搔 へ一本
- 5 武器類
- 4 太刀 へ一腰 一振 抜タルハ一振 小太刀ハ一腰 一口
- 3 一柄 中半太刀野太刀長キヲ振ト云
- 2 刀脇挿 へ二腰 一柄／古 へ或ハ稱ニ一口ト
- 1 鐵砧落 へ一枚 薙刀 へ二枝 一柄 鎧 へ一本 一柄／一挺
- 10 戟 へ一本 一柄／一竿 一
- 9 軍配團 へ一 一枚／不レ謂ニ一本ト 旄 へ一振 一通
- 8 旗 へ一流／竿 添テハ一本 母衣 へ一掛
- 7 冑 へ一頭 一ツ 味方 へ一 勿指敵 喉輪 へ二下
- 6 釵 へ一手 脇引 へ一肌
- 5 肩當 へ一面 脛當 へ一掛
- 4 腰當 へ一 佩楯 へ二下 腹卷 へ一披 上帶 へ一
- 3 鎖帷子 へ一枚
- 2 手楯 へ二丁 一帖 へ一枚
- 1 車楯 へ二輛 竹束 へ二束 車ニ仕掛タルハ一輛ト云
- 10 幕 へ二帖 八陽幕陰幕合テ云 一ツ 八片片 へ一張 一具 一條 一字 一口 舩 へ一 走不吉 へ一張

一〇

1 鐵砲テツポウへ一挺 一口／一門

2 射具類

3 弓へ一張

弦袋へ一口

4 弦へ一條 二十條為ニ一桶ト 或ハ二十二亦十二二十八

／俱ニ同 一箱ハ三十八筋ナリ 草鹿ノ時クサカハト筋

5 ヲ一張ト云百手ノ時ハ十二筋ヲ一張ト云／又七筋ヲ一張ト

云時アリ

6 矢へ一隻 一枝 一本 二十一隻為ニ一腰ト 十六或／五

十一為ニ一把ト又十隻為ニ一具ト

7 的矢指矢へ二本為ニ一手ニ 征矢ツヤへ一條 一隻 又

二十五條為ニ一腰ト

8 雁眼平根へ二二

トカリヤカフ

9 曇目へ一本 曇目鏡ハ二二腰ハ四本／一把ハ二十二本

一束ハ四十本

10 的へ一枚 一箱トハ小的組入／ヲ云凡五ツナリ

鞆へ一指

1 胡篋コクシヤへ一腰 一具／一口

箆尻籠エビラシコへ一腰

2 弓架大 斬へ二被 立弓矢則稱ニ一飾ト

3 刀飾類

4 鐔ツバへ一枚

メスキ 鋤へ一具

5 縁鑷ヱリカシラへ一

柄鮫サメへ一本

コボヤ 笄小柄小刀へ一本

6 下緒へ一條

7 鷹具類

8 策ムチへ一條

ユガケ 鞆へ一指

9 條ヲホホへ一指／詞ニハ一條

10 餌簞エシクロへ一

アシオハオ 脚胖鯨アシオハオへ二指／詞ニハ一柄

鈴スズへ一柄

鈴板スズイタへ一枚

馬具類

一〇

1 鞭へ一條 一本／古或ハ稱ニス一具ト へ一具

2 大腹帶オウビへ一卷

3 手綱テウナへ一條／腹帶ヲ副テ一具ト云

4 三尺繩サンシヤクへ一條

5 鞍クラホネへ一口 一具／一背シバリタルヲ云 鞍橋クラホネへ一具 一架

6 鞍覆クラホネへ二敷 一掛／又一ツトモ 鞍捕付物クラホネ付へ一搦

7 鐙クラホネへ一足 一掛／一隻 一具 銜クラホネへ一口 一鑣

8 一具 板馬氈イタバセンへ一枚

9 逆サカサマへ一登 一具 靴ハシムチカハ 小口繩ハシムチカハへ一間

10 轡束タスケへ一懸

11 鞆クラホネ 鞆クラホネへ一具 一掛／一卷

12 鞍クラホネへ一具 不着于／鞍クラホネ者稱ニ一口ト

13 障泥クラホネへ一指 一具／一掛 馬衣バキヌへ一枚 一服

14 馬裸ムマハダへ一肌

15 追綱ムマハダへ二筋 馬櫛マクシへ一刷 一枚

16 廐幕マヤクへ二張

17 帛服類

18 御衣ミカドへ二領 一具 袍ハウへ二領

19 帶オビへ一條 冠カウラヒカケ 頭巾コシ 巾コシ子コシへ二條 頭巾コシハ一枚

20 烏帽子カウラヒカケへ一頭

21 包頭ハチマキへ一頭 上下へ一具

22 袴ハチマキへ一對 一下／一腰

23 小袖コウソウへ一重トハ二

24 行騰ユカケへ二懸 一具 拾單物帷子被衣ハチマキへ一領

25 足袋タビへ一足 一雙 脚纏ハチマキへ一具

26 卷物マキモノへ二卷 一端 絹細布ヌメへ一端 二端ヌメヲ為ニ一足ト

27 羅紗シヤへ一間

28 綿ワタへ一把 紐ヌメへ一條

29 藉物頭セキモノ

松沢老景著『品物名数抄』について(三保)

松沢老泉著『品物名数抄』について(三保)

- 9 毛氈モウセンへ二枚 一陳一陳 敷皮シキカウへ一敷
- 10 床几シヤウキへ一脚 一敷
- 10 圓座エンザへ二枚
- 風呂敷フリュウシキへ一條
- 1 薦コモシロへ二枚 一鋪
- 地敷チシキへ一枚
- 2 臥具類
- 3 枕マクらへ一枚 一基
- 夜著ヨシヤクへ一領
- 4 蒲團フツタンへ一枚
- 茵インへ一枚 一條/一具
- 5 僧具類
- 6 舍利塔シヤリダツ 經臺キヤウダイへ二基 如意ニヨイへ二柄 一枚
- 7 蠅拂ハハラクビシヤク 錫杖シヤクへ二枚/拂子フシ一柄
- 念珠ネンジュへ一貫 一連/一本 珠數(マ) 卓圍ウチシキへ一張
- 直綴ヂキトツへ一領
- 8 手巾テヌキへ一條 袈裟ケサへ一領 一帖 一頂/一具 一張
- 9 坐具ザイへ一枚 一條/一具 一張
- 10 金玉類
- 1 樽代タルダイへ此即チ錢ナリ俗ニ青銅ト云ニ貫文ヲ稱ス
- 百疋ト○按マ按金銀亦与レ錢無レ異然ハ古來稱スルハ
- 樽サ代ト者錢而已
- 2 金銀キンギンへ謂ニ金一枚二枚ニ者大判ナリ一兩二兩トイフハ
- 小判ナリ 小判ハ一枚二枚ト稱セス銀ハ一枚
- 3 トイフ今俗或ハ金一分為三百疋一以ニ金三分一充ニ
- 銀一/枚ニ但通礼ニハ非ス今畿内ハ四十三文目ナリ
- 4 珠玉シユウへ一顆/一丸
- 5 家具類
- 6 長持ナガモチへ二枝一掉ツ一棧ヒツへ二棹 一架
- 長櫃ナガクビへ一合
- 7 簞タシへ一箇一箇 筥ヒツへ一箇
- 手拭掛テヌキケへ一飾
- 8 屏風ビヤウへ片枝 架ツ一帖/二ハ二雙
- 9 几帳キヤウへ二基
- 10 簾スダレへ二張 一連
- 十二手ジュニテ 匣ハコへ一合
- 10 行器コウキ 葛籠カキツツへ二荷/一ハ片枝
- 食籠シキロウへ一具
- 1 折オリへ一合
- 2 ヲ書カハラケナリ稱ス蓋幾テウシ・口マニ
- 3 土器ツキへ一口 一枚 銚子テウシへ一/共ト提ト謂ニ一具ト
- 樽ツツへ一樽/一荷ハ二
- 3 椀茶ワンチャ・椀皿ワンビツ 沙鉢サハチ・鉢ハチへ一口
- 壺花瓶ウツクハビンへ二瓶 一口/一壺
- 4 切立キリタリへ二對
- 風爐フロへ一居/一具
- 5 釜カマへ一口
- 6 烟管ケンカンへ一本/二本ハ對
- 7 剃カシ刀ハコへ一口/詞ボンニハ一丁
- 砥キスタへ二挺 一顆/又青砥アヲ稱一枚
- 8 砧キスタへ一枚
- 9 夜用類
- 10 燈臺テウダイへ一基 一本/一具
- 1 燈樓テウロウへ一基
- 2 松明タイマツへ二帶 一把/一束
- 3 傘カサへ一本 一張
- 3 鞆タヌへ一足 一兩/一雙
- 笠カサへ一蓋 一枚
- 1 燈籠テウロウ 提燈テウチン 行燈コウテウ 燈籠テウロウへ一張
- 蠟燭ロウソクへ一挺
- 鏡キョウへ二面
- 箸火箸シヤウへ一揃/一具
- 臺ダイ子スへ一飾
- 御厨子ミツシへ一基
- 重匣チウバコへ一組 一提
- 盃サカツキ 盃臺サカツキダイへ書翰數シヤウカンヲイハス繪様
- 鉢ハチ子スへ一/共ト提ト謂ニ一具ト
- 箸シヤウ火箸シヤウへ一揃/一具
- 鏡キョウへ二面
- 臺ダイ子スへ一飾
- 御厨子ミツシへ一基
- 重匣チウバコへ一組 一提

4 草履木履へ一足

5 乗載類

6 駕輿へ二丁／輿一具

船へ一艘 一隻

7 菜果類

8 大根へ一本 十本為二一束ト或ハ數不レ定一折ハ総數ヲ

イフ數不レ定瓜茄へ一ツ一顆／甜瓜十ヲ謂二頭ト

9 牛・旁胡・蘿蔔・獨活・活炭へ一把／獨活ハ一本ニ本トモイ

フ(トモ)ハ合字

10 昆布へ一連 一折 果 へ一顆 一

梨へ一圓

1 艸木類

2 木へ一枝 一朵／一本 一株 艸へ一莖

花へ一葉 一本／一輪

3 飲食類

4 索麪へ一把 饅頭へ一團

5 茶へ一袋 一封 肴へ一種

6 烟艸へ一把

7 肉味へ一截

8 魚介類

9 諸魚へ一喉 一丙／一尾 一折へ魚七ツマテハ員數ヲ書

ベシハツ以／上一折ト書ク

10 按一丙ノ之稱今世不レ用如二喉一尾ノ亦非ニ礼

家之通ノ稱一也平・常或ハ吉・嘉之饋モノ書ニツニト

可ナリ但隨レ物而有ニ異稱一ノ各見レ下ニ 鯛へ一枚

1 鯉へ一折

10 鮒へ一枚 一折 鮓へ一尺 一隻

鱒へ一枚

1 鱈・鰻・魚・鰻・鱈・鰻・鰻へ一本

年魚へ一

2 烏賊蛸へ二杯 蝦へ一折

3 挾鯖へ二挾

4 鯛・鰻・節へ二連一折 水・母へ一桶／一本ニ海月

5 寶卷へ二卷

6 諸貝へ一折 一鉢／一籠 蛤 一杯 鮑 へ貝類七ツマテハ員數ヲ

書クハツ以／上一ハ一折一鉢トカクベシ

7 鮑ハ一杯二杯ト書テヨシ／蛤ハ何ニ入テモ一籠ト書ナリ

8 熨斗鮑へ一本不レ書ニ一把握本

9 鳥獸類

10 諸鳥へ一隻 一翼 一頭 一翅 雌雄合セテ番ト云／鳥ノ數一

番トカク祝言ノ時常用ハ二ト書

1 掛鳥へ一掛 鷓鴣へ一羽

2 鷹へ一聯 一居／一連一本一窠

3 一本ハ大鷹一巢ハ窠鷹三モトヨリ内ハ連ノ字ヲカ、ズ禁

將ヨリ外ハ本ノ字ナラズ 大君様へ被シ／召

4 上一候ハ此方ヨリモコノ本ヲカクナリ大鷹ハ大君様ノ御

鷹ナリ

5 鷹尾へ一尻 一尾／尾羽揃テ一鳥ト云

6 鳥羽へ一枚 一莖

7 鷹之犬へ一牙 兎へ一ツハ片耳ニツハ一耳

8 鹿野猪へ一蹄／一頭

9 馬へ一疋 革へ一枚 一條／一張

10 雜品類

1 網へ一帖 鍬鋤へ二丁 一口

2 繩へ一條 一把／一束

3 網へ一條 荷物へ一箇／馬ニハ一駄

4 柴薪へ一把 一束

5 材木へ一木 一根 樽 へ二丁 一村

6 8 9 (二行空白)

10 品物名數抄 終

四、考察1

右は、まさしく「助教詞」の用法を説いたものであるが、それは主に書状類における礼法の一つとしてのものであったらしい。本文中に、次のように見えることがある。

「家具類」の条に、「盃 盃臺 書翰數 ライハス 繪様 ヲ書 ナリ 稱 盃臺、
口ニマツル」

「魚介類」の条に、「諸魚 ハ一喉 一丙 ノ一尾 一折 ハ魚 七ツマテ ハ員數
ヲ書 ベシ ハッ 以 上 一折 ト書ク」

按一・丙ノ之稱今・世不レ用如二・喉一・尾ノ亦非
一礼家之通ノ稱一也平・常或ハ吉・嘉之・饋モ書
一ツ二ト」

「諸貝」 ハ一折 一鉢 ノ一籠 一 杯 ハ 貝類 七ツマテ
ハ員數 ヲ書ク ハッ 以 上 ハ 一折 一鉢 ト カク ベシ」
「蛇 ハ 二杯 二杯 ト書テ ヨシ ハ 何 ニ 入 テ モ 一籠 ト書
ナリ」

「熨斗 ハ 一本 不レ書 一 把 ト 幾本」

「鳥獸類」の条に、「諸鳥 ハ 一 翼 一 頭 一 翅 雌雄 合 テ 番 ト
云ノ鳥ノ數一番トカク祝言ノ時用ユ常ハ一二ト書」

「鷹 ハ 一 聯 一 居 ノ 一 連 二 本 一
一本ハ大鷹一巢ハ窠鷹三モトヨリ内ハ連ノ字ヲノ
カ、ズ禁將ヨリ外ハ本ノ字ナラズ 大君様へ被
三ノ召上 一候ハ此方ヨリモコノ本ヲカクナリ大鷹
ハノ大君様ノ御鷹ナリ」

これらからして、本書は、書状・折紙・目録などにおける進物の数量表現につき、その言葉遣いや文字用法を説く書札礼であると知れよう。単に助数詞用法を示すだけで、一々、「…ト書ク」「…ト書カズ」とは見えない条もある。全体的にはこの方が多いが、それは、むしろ、本書執筆上の基本的姿勢がここにあるからのことには他ならない。

「鷹具類」の条に、「條 ハ 一 指 ノ 詞 二 ハ 一 條」

「脚絆 ハ 一 指 ノ 詞 二 ハ 一 柄」

「家具類」の条に、「剃 ノ 刀 ハ 一 口 ノ 詞 二 ハ 一 丁」

また、このようにも見える。この「詞二ハ…」とは、書記語に対する口頭語・俗語を示したものらしい。だが、これらは、あくまで書記語を基調とする文脈のなかの付加情報に過ぎない。

五、考察2

本書(品物名数抄)の、後代への影響として、次が指摘できる。

東書文庫蔵『新板用文章』一冊は数多い例文集の一つであるが、その刊行部数・刊行者などは不明である。刊記がなく、その刊行年次も不詳であるが、後表紙見返しに「御書物古本賣買所」として「書肆 心齋橋通唐物町ノ河内屋太助」の書肆紹介・広告がある。河内屋太助は、天明(一七八一〜一七八九)頃に開業した大阪の板元・売出元で、寛政六年(一七九四)から明治六年(一八七三)の営業期間が知られている。従って、『新板用文章』は江戸後期(一九世紀前半)、大阪における出版物かと見受けられる。本書後半には、預かり手形・預かり銀証文などの例文が見え、「銀」「銀子」の用語が散見する。

『新板用文章』の頭書欄には、「書札認様の心得」から「服忌令」まで、庶民の書記生活における諸種の参考事例が示されている。そうした内の一つに「諸品物名数」と題する一節がある。やはり、多くの対象物をあげてその助数詞を示したものであり、この詳細については、先の小著において紹介した。その助数詞用法には、他の資料に見るところと多分に異なる様相が認められ、また、その分類方法も、他書には見られない独特のものであることに強く興味を引かれたが、その編纂事情や背後の状況などについては未詳とせざるを得なかった。

ところが、この「諸品物名数」と題する一節は、今の松沢老泉の著作『品物名数抄』一冊と、まず、基本的にはびたりと一致する。両者の間の影響関係は明白である。但し、照合すると、後者にあつて前者にない分類項目がある。これは、項目名だけのことでなく、そこに属する語彙群全体に関わることである。次に、『品物名数抄』の分類項目を列記しながら(項目名の内、後者の「藉物類」「夜用類」は前者に「藉物類」「夜具類」とある)、それが

前者にもあれば○印、なければ×印を付す。

- 文具類 ×楽器類 ×玩具類 ○佩用類 ×武具類
 ×射具類 ○刀飾類 ×鷹具類 ×馬具類 ○帛服類
 ○藉物類 ○臥具類 ×僧具類 ×金玉類 ○家具類
 ○夜用類 ○途用類 ○乗載類 ×菜果類 ×艸木類
 ×飲食類 ○魚介類 ○鳥獸類 ×雑品類

両者間の影響関係としては、A老泉著作の『品物名数抄』を踏まえて『諸品物名数』を作ったか、または、B『諸品物名数』を増補して『品物名数抄』を著作したか、のいずれかとなるが、採るべきはAであろう。「武具類」「射具類」「鷹具類」「馬具類」「僧具類」などは、武家・僧家に関わるものであり、町家の庶民階層には縁遠いものである。ここらでは、せいぜい、「佩用類」「刀飾類」で事足りるとして削られたのであろう。「楽器類」「玩具類」や「菜果類」「艸木類」「飲食類」「雑品類」なども外されている。是非にということもなかったのであろう。「金玉類」は、多く金銭に関するものだが、やや理屈に過ぎるので外されたのであろう。「鳥獸類」の末尾に「馬(一疋)」とあったのも外されているが、これも意図されたものであろうか。

- 右は、分類項目の面から照合したものであるが、○印の項目下の語にも大小の差異がある。↓印の上に『品物名数抄』の語形、または、語順を示し、下に「諸品物名数」のそれを示す。：印は、省略部を示す。振り仮名は省く。
- 〔文具類〕 ……書状・書籍・懐紙・巻物・掛物 ↓ ……書状・懐紙・巻物・掛物・書物
 紙・巻物・掛物・書物
 〔佩用類〕 ……印籠巾著緒ト根著・櫛・髪搔 ↓ ……櫛・髪搔
 ・印籠巾著緒メ根著
 〔帛服類〕 〔冠袴頭巾巾子〕〔脚纏〕〔巻物〕 ↓ (これらの語はない)

- 〔藉物類〕 ……蓆筵・蘭席・地敷 ↓ ……蓆筵・地敷・蘭席
 〔臥具類〕 ……蚊帳・夜着…茵 ↓ ……夜着・蚊帳…褥
 〔家具類〕 ……長持・櫃・長櫃・簞(籠)・筒・衣桁・手拭掛・屏風・几

- 帳・簾・御厨子・十二手匣・行器葛籠・重匣・食籠・折・盃盃臺・土器・銚子・樽・椀茶椀皿沙鉢・壺花瓶・切立・臺子・風爐・釜・箸火箸・烟管・烟艸盆・鏡・剃刀・砥・脇息・砧・連臺 ↓ 長持・櫃・衣桁・手拭掛・几帳・屏風・簾・御厨子・簞筒・長櫃・十二手匣・重匣・行器葛籠・食籠・折・土器・切立・銚子・椀茶椀皿鉢・樽・壺花瓶・臺子・風炉・釜・箸火箸・烟艸盆・砧・鏡・剃刀・砥・脇息

(右の場合、語順が大きく異なり、傍線部の語は「諸品物名数」にない)

- 〔夜用類〕 ……燈籠・燈楼・蠟燭… ↓ ……燈籠・蠟燭
 〔魚介類〕 ……諸魚・鯛・鯉・鮎・鮭・鱒・鱒魚・鱒魚・鱒魚・鱒魚・年魚・烏賊蛸・蝦・挾鯖・鯛鯉節・水母・寶卷・諸貝
 〈蛤・蛸〉・熨斗蛸 ↓ 諸魚・鮎・鯛・鯉・鮭・鱒・鮎・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚
 鮎・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚・鮎魚
 水母・蛤・蛸・熨斗蛸

各対象語の下の双行割り書の条には助数詞の用法が示され、ここにも大小の差異があるが省略する。また、この他、「諸品物名数」の場合、その項目名と対象語には平仮名総ルビが付されている点も、『品物名数抄』と相異なる(『品物名数抄』では、難しそうな対象語に片仮名のルビが付されている)。

以上を総合すれば、「諸品物名数」は、老泉著作『品物名数抄』を踏まえたものである、しかし、そのままのものではなく、町家の日常的な書札類に必要な助数詞類を中心に取捨選択したものと考えられる。

六、おわりに

『品物名数抄』は、もっぱら助数詞用法に関する専門書である。助数詞の対象による分類を行ったものであり、助数詞そのものを考えようとしたわけでないが、その用法に焦点を当てたという点、特殊な著述である。尾張の岡

田挺之に『物数称謂』(寛政八年へ一七九六)自序刊)という編者がある。これも注目すべき存在であるが、『品物名数抄』は、日本人の言語生活を前提とするものであり、その意味で重要な存在である。

『品物名数抄』の意義を説明する上で次のような問題がある。本稿の課題としておきたい。

- 1、松沢老泉は、なぜ、『品物名数抄』を著作したか。その目的、意図、動機は那辺にあったか。書記生活上の資とするものではあるが、この点をもっと詳しく究明する必要がある。
- 2、彼が参考とした資料は何か。他書を参看しながら編集、編纂したものか、あるいは、自らの工夫・内省によるものか。すべてが内省によるものとは考えられない。先行資料を探索する必要がある。

注

- (1) この人物についての言及は多い。一端をあげる。渡辺刀水「松沢老泉の「堂前隱宅記」」(『書誌学』、第六卷一号、昭和十一年一月)、弥吉光長校『日本書誌学大系25 松沢老泉資料集』、昭和五十七年八月、青裳堂書店。森川彰「松沢老泉正本考」、大谷篤感編『近世大阪芸文叢談』、昭和四十八年三月、中尾松泉堂・赤尾照文堂、所収。
- (2) 井上和雄編『叢書買集覧』(大正五年九月、彙文堂書店、昭和五三年六月、言論社)。
- (3) 小畑詩山は、明治八年へ一八七五)歿、行年八二歳。『慶元堂記』は、老泉五世(四代目の久太郎か)の後の慶元堂泉庄のために作ったもので、摘録は右の渡辺刀水「松沢老泉の「堂前隱宅記」」に収められている。
- (4) 大槻如電は、仙台藩儒大槻磐溪の長子として江戸に生まれる。名は清修、字は念卿、号は如電、通称は修二。大槻文彦(国語学者、『大言海』の編集者)の兄。幼くして漢学・国学を修め、明治八年に弟文彦に家督を譲って隠居し、仙台藩『新撰字書』の編集に従事する。和漢洋に通じた博学家として知られ、日本音楽歌曲にも造詣が深かったという。昭和六年(一九三一)歿、八七歳。
- (5) 国立国会図書館蔵の『彙刻書日外集』六卷には、「文政二丁卯五月松

沢老泉撰」の「自叙」と、この前に亀田鵬齋の「序」とがあり、この末尾は「辛巳之冬／鵬齋老人識」とある。出版は、文政四年冬であろうか。また、国立国会図書館蔵本の奥付には「東京下谷南稲荷町和泉屋庄次郎蔵板」とある。この店の所在からすれば、これは四代和泉屋庄次郎(五戒庵)の後版ということになる。

- (6) 注(1) 文献、弥吉光長氏による(『日本書誌学大系25 松沢老泉資料集』、四五八頁)。
- (7) 坂本宗子編『以後板元別書籍目録』(昭和五十七年四月、清文堂、二四頁、他)。
- (8) 注(1) 文献、森川彰氏による。
- (9) 所蔵元を意図的に、しかし、恣意的な形で伏せたもので、結局、某氏蔵書といったことかと推測される。所蔵元にも都合はあるわけで、その実名を伏せることは了解できないことではない。だが、編集部は、読者にも誠実であらねばならない。中途半端な形で表示されると、読者は無意味な努力を強いられる。「学書言志」につき、その凡例には、所蔵元の意向によって明細は省くとも明記しておいていただきたい。
- (10) 拙著『日本語助数詞の歴史的研究 近世書札礼を中心に』(二〇〇〇年一月、風間書房)、第一部(二七、二〇七―二二八頁)。